

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第522号 平成25年4月4日

心の内が透けて見える

札幌市内の市立中学校で、学級編成で使用する内部文書が流出した問題が大きな波紋を広げています。

報道によると、流出した文書というのは、新2年生のクラス替えの際、学年担当の教員が協議するために使用する個々の生徒の情報や配慮事項を記載した内部資料で、学年主任が作成し複写して1年生の担任教師4人に配布したものです。

この内部文書が流出した経緯は、3月6日、美術教師が校内で1年生の女子生徒に卒業式の資料を渡した際、その資料の中に問題の内部文書が紛れ込んでいたというものです。1年生の担任教師に配布した内部資料がどうして美術教師に渡ったのかは不明との事です。

また、この内部文書には、生徒の個人名が書かれた表に、周囲と打ち解けられない生徒を「障害」、同級生とけんかした生徒を「反社会」、仲が悪い同級生と違う学級になる事を希望している生徒や親を「クレーム系」などと分類し、記載されていました。

学校側では、保護者からの連絡があるまでこの内部文書の流出に気付いていなかったという事ですが、その間に、内部文書が保護者の間に広がってしまい、取り返しのつかない事態となってしまいました。

札幌市教委は当初、取材に対して文書流出の理由を「女子生徒が持ち帰ったため」と説明していましたが、実は、学校側の杜撰な管理に原因があったとの事ですから、驚きです。

今回の一連の経過の中で問題として認識しておかなければならない事は、単に内部文書の管理が悪いという事だけではありません。むしろ、深刻なのは、内部文書に書かれている内容にあると思います。

内部文書を見た保護者や子ども達は、教師たちが自分をどのように見、評価していたか、その心の内を透かして見たに違いありません。

今回明らかになった内部文書の記述について、上田札幌市長は「教職員が上から目線で子どもにレッテルを張ることは許されない」と述べています（3月28日付読売新聞）し、下村文部科学大臣は「教育現場として常識を逸脱した、人権問題にもかかわるような表現だったのではないか」と述べています（3月26日付北海道

新聞)。

私は文書の現物を見ていませんので、報道の範囲でしか知り得ないのですが、それでも、教師が作った枠組みに子ども達を合わせて、それに合えばよし、合わなければ問題児と評価・分類するような発想は、子ども達を管理する視点でしか見ていないという事であり、教育という視座に欠けているといわざるを得ません。

札幌市教委では、3月26日に開催した各学校の校長を対象にした教育方針の説明会の会場で、校内での文書管理や文書中の表現への配慮を徹底するよう指示したそうです(3月26日付北海道新聞)。

文書管理や文書表現に細心の注意を払うべきは当然の事で、その事とかく申し上げるつもりはありませんが、最も重要な事は、文書表現の仕方ではなく、その心持ち、即ち、一人ひとりの教師が子ども達にどう向き合うかという姿勢にあるという事を、忘れないで欲しいと願っています。(塾頭：吉田 洋一)